

【研究ノート 3】

詩人ヴァンギーサ (Vaṅgīsa) の生涯

森 章司

[1] 比丘ヴァンギーサ (Vaṅgīsa 漢訳では婆耆舎、婆耆奢、多耆奢、傍耆舎と表記される。婆耆奢耶旬という訳語も見いだされるが「耶旬」が何を意味するのかはわからない) は詩人として有名で、AN.001-014-003⁽¹⁾ では「具弁才中の第1はヴァンギーサである」とされ⁽²⁾、『増一阿含』004-003⁽³⁾ では「言論弁了にして疑滞なきもの」「能く偈頌を造り、如来の徳を嘆ずるものの第一」と誉め称えられている⁽⁴⁾。また *Theragāthā* の掉尾を飾るのはヴァンギーサの偈頌を集めた「大いなる集成 (mahā-nipāta)」であることがこれを象徴する⁽⁵⁾。

本稿ではこのヴァンギーサの生涯の概略、特に出家年と入滅年を考える。1人の比丘の生涯が大まかであるとはいえ、原始仏教聖典の中でこのようにトレースできるのも、残された彼の詩のたまものである。

なお本稿中にはアーラヴィーという地名がしばしば現れるが、この漢訳での表記は曠野城、曠野禽獣の住処、第一曠野林などである。

(1) vol. I p.023

(2) このそれぞれの分野における第1を上げる項は、10人ずつの長老比丘の名が称賛されており、アンニャー・コンダンニャや舍利弗らが第1のグループ、チュッラバンタカやマハーバンタカラが第2のグループ、ラーフラやラッタパーラ (Raṭṭhapāla) らが第3のグループ、阿難やウルヴェーラ・カッサバラが第4のグループであって、ヴァンギーサは第3のグループに収められている。

(3) 大正 02 p.557 中

(4) ここには10人ずつの長老比丘が上げられている。阿若拘隣、優陀夷らが第1のグループ、馬師、舍利弗らが第2のグループ、軍頭婆漠、賓頭盧らが第3のグループ、狐疑離曰、婆嗟らが第4のグループ、婆拘羅、滿願子らが第5のグループ、尸婆羅、優波先迦蘭陀子らが第6のグループ、釈王、婆提婆羅らが第7のグループ、鶩掘魔、僧迦摩らが第8のグループ、梵摩達、須深らが第9のグループ、那伽波羅、婆私吒らが第10のグループであって、ヴァンギーサは第3のグループに収められている。

(5) これは主に SN.有偈篇第8の「ヴァンギーサ相応」中の偈を集めたものである。おそらく原始仏教聖典の編集史的には SN.の方が早いものと考えられる。なお *Theragāthā* には Sn. の vs.343~358 も収められている。これらの編集史的な先後関係はわからない。

[2] まずヴァンギーサの出自を調査する。

むしろ B 文献として扱うべきであるが、*Apadāna* 03-55-541⁽¹⁾ は、「最後有においては遍歴者の家 (paribbājakula) に生まれ、7歳で一切のヴェーダを知り他論を粉碎した。ヴァンガ (Vaṅga) に生まれ、あるいは語の主宰者であるがゆえに (Vaṅge hi jāto Vaṅgīso vacane issaro ti vā)、ヴァンギーサという名が世に知られた」とする。

原始仏教聖典にはヴァンガという地名はこのほかには現れないが、*Malalasekera*⁽²⁾ によ

れば「現在のベンガル」とし、*Mahāvamsa* (3)、*Dīpavamsa* (4)には、*Sihabāhu* と *Sihasiṅgali* の母はヴァンガの王女であり、カリンガ国王と結婚したヴァンガの国王の娘であったとされ、また *Milinda-pañha* (5)には海上貿易の場所であったとされる記述を紹介している。

しかし次項以降に紹介するように、ヴァンギーサの和尚 (*upajjhāya*) はニグローダカッパ (*Nigrodha-kappa*) であり、ニグローダカッパの登場する経は以下に紹介するように *SN.008-001* (6)、*SN.008-002* (7)、『雑阿含』1213 (8)、*SN.008-003* (9)、『雑阿含』1221 (10)、『別訳雑阿含』255 (11)、*Suttanipāta 002-012* (12) の9経であるが、その所在はすべてアーラヴィー (*Ālavī*) である。したがってニグローダカッパの主に活動した地はアーラヴィーであって、その共住弟子 (*saddhavihārin*) となったヴァンギーサはこの地の出身であったとも考えられる。しかしこれも次項に紹介するように、ヴァンギーサは吟遊詩人として諸国を遍歴している時に釈尊に会ったとされているから、むしろこのように限定しない方がよいであろう。

なおアーラヴィーの位置はよくわからないが、現在のところわれわれは今のインド・ビハール州の *Ballia* あたりと想定している。*Ballia* はガンガー河に沿ってバーラーナシーから東に130km、パトナからは西に100kmのところにある (13)。

(1) p.495

(2) p.802

(3) 6-1 以下。ここにはヴァンガ王とその王妃であるカリンガの王女の間には1人の王女が生まれ、この王女と獅子の間に生まれた子がシーハバーフとシーハシーヴァリーであるとしている。
p.056

(4) 9章 ここではヴァンガ王の娘と師子の間に生まれたのがシーハバーフとシーヴァリーであるとしている。p.054

(5) p.359 ここでは *Takkola*, *Cīna*, *Sovira*, *Suratṭha*, *Alasandi*, *Suvaṇṇabhūmi* と並記されている。

(6) vol. I p.185

(7) vol. I p.186

(8) 大正 02 p.330 下

(9) vol. I p.187

(10) 大正 02 p.333 上

(11) 大正 02 p.463 上

(12) p.059

(13) 「モノグラフ」第15号(2009年10月)の【補註7】pp.629~633 参照

[3] 次にその出家について調査する。

[3-1] ヴァンギーサの出家について語る資料には次のようなものがある。なお慣例にしたがって釈尊の在処には実線の下線を施し、注意していただきたい文章には破線の下線を施す。また登場人物は太字とするが、本稿では地名についても太字とする。

SN.008-012 (vol. I p.196) : かつてわたしは詩作に夢中になって村から村へ、町から町へと放浪した。そのとき私は世尊に出会い、その言葉を聞いて家を捨てて出家した (*pabbajim anagāriyam*) 。

Theragāthā vs.1253~1255 (p.112) : [ヴァンギーサの詩] 同上

『雑阿含』1217 (大正 02 p.331 下) : [婆耆舎の詩] 本欲心もて狂惑し、聚落及び家々に遊行したが、遇ま仏を見るに、瞿曇は哀愍せしが故に、我が為に正法を説かれた。そこで出家した。

『別訳雑阿含』252 (大正 02 p.462 上) : [婆耆奢の詩] 私は昔荒酔のごとく諸々の城邑を遍歴していたとき仏に会った。瞿曇は悲愍して私に正法を説いて下さり、清浄信を得て出家した。

Apadāna 003-055-541 (p.495) : [ヴァンギーサのアパダーナ] 私は分別のつく年齢に達し、青年の初期に在った時 (viññutaṃ patto ṭhito paṭhamayobbane)、その時美しき王舎城において舍利弗に会い話を聞いて、舍利弗のもとで「出家をさせてください (pabbājehi)」と言った。彼は私を最勝なる仏 (buddhaseṭṭha) のもとに連れて行き、私は世尊のもとで出家した。

このようにヴァンギーサは吟遊詩人としての遍歴の旅の途中で釈尊に会って出家したとされる。その場所は *Apadāna* によれば王舎城であったとされている。

[3-2] ヴァンギーサの出家については、*Suttanipāta-A.*⁽¹⁾ や *Dhammapada-A.*⁽²⁾、*Theragāthā-A.*⁽³⁾ などパーリの註釈書にも記されている。註釈書特有のモディファイがなされているが、これらによってその概略を紹介すると次のようになる。

ヴァンギーサは遊行者 (paribbājaka) の子で、女遊行者 (paribbājikā) の腹に生まれ、死んだ人の頭蓋骨を叩いてその生まれ変わったところを知るという呪法 (vijjā) によって有名であった。そこで彼は全インドを遊行して、人々の親類縁者の生まれ変わったところを占ってお金を得ていた。こうしてある時彼は舎衛城にやって来た。そのとき世尊も舎衛城に滞在されていて、人々が世尊に会いに行くのを見て、彼も連れ立って行って世尊に会った。世尊は「あなたは死んだ人の頭蓋骨をたたいて、生まれ変わったところを知るというのが本当ですか」と尋ねられた。彼は「その通りです」と答えた。そこで世尊は5つの頭蓋骨をもってこさせて、その1つ1つを占ってみさせられた。4つの頭蓋骨については次々と誤りなく占って見せたが、5つめの煩惱が滅した (khīṇāsava) 人の頭蓋骨だけはわからなかった。世尊は「それはあなたにはわからない。私だけが知る領分で、出家しなければ教えられない」と語られると、彼は出家を願い出た。そこで世尊はそばにいたニグローダカップに、「この人を出家させなさい (imaṃ pabbājehi)」と出家させた。この後ヴァンギーサは阿羅漢果を得て、世尊は彼を「私の弟子たちの中で弁才ある者たちの中の (paṭibhānavantānam) 第1人者」と讃められた。

このようにここでは詩作をして生活するのではなく、頭蓋骨を叩いてその生まれ変わったところを占うという呪法によって生活していたとされている。また釈尊に会った場所は舎衛城となっており、釈尊はそばにいたニグローダカップに命じて出家させたともしている。

(1) vol. I p.345、村上・及川訳『仏のことば註』第2巻 p.597

(2) vol. I p.345、*Burlingame*, Part III p.334

(3) vol. III p.180

[3-3] 「モノグラフ」第16号に掲載した【論文22】「原始仏教聖典などにみる就学・結婚などの平均年齢」によれば、学業の修了年齢や就業年齢、結婚年齢、隠棲年齢などの平

均年齢は16歳である。要するに原始仏教時代のインドでは、満16歳が一人前の人間として独立する平均年齢であったということであって、したがってヴァンギーサも16歳ころになってから遍歴生活に入ったと考えてよいであろう。原始仏教聖典の方を信頼すれば、自作の詩を詠んで生活の糧を得る、いわば吟遊詩人のような生活をしていたのである。

その後何年くらい遍歴生活を続けたかわからないが、その後釈尊に出会って出家したということになる。その時期を *Apadāna* は「分別のつく年齢に達し、青年の初期に在った時」としているからおそらく満20歳くらいの年齢を想定しているのであろうが、これは具足戒を受けることができる最低年齢を想像したものではなかろうか。しかし後に考察するように、ヴァンギーサは釈尊より先に亡くなっており、これは非業の死ではなく、おそらく病死であったであろうから、むしろ釈尊よりも年配であったかもしれないし、次項以降に紹介するように、出家直後に若い女性を見て欲心を起すなどということは、むしろ中年になってからのいやらしさを感じられるから、出家時点においてすでにかかなりの年齢に達していたのではなかろうか。当時のインドの宗教界は新しい沙門教が現れるとともに、旧来のバラモン教でも遊行期が形成されつつあった時で、宗教の変革期にあったのであるから、後の時代のように出家比丘となるにはまず子供時代から沙弥となって教育を受けるという、安定的に後継者を養成する文化はまだ形成されていなかったであろう。それは釈尊自身の出家を考えれば納得のいくことである。

ということでまったく推測の域を出ないが、ヴァンギーサは吟遊詩人としての遍歴を20年間ほど過ごして、36歳ころに釈尊に出会って出家したということにしておきたい。この推測は、次項以降において徐々に納得していただけるようになるものと信じる。

[3-4] ところでヴァンギーサはどのような形で具足戒を得たのであろうか。先に紹介した資料では釈尊のもとで出家したとするから、釈尊から「善来比丘具足戒」を受けて釈尊の直弟子になったような印象を受けるが、どうもそうではなかったようである。なぜなら [4] で紹介するように、ヴァンギーサの和尚 (*upajjhāya*) はニグローダカッパとされているから、ヴァンギーサの出家は和尚と共住弟子の制ができてから、すなわち「十衆白四羯磨具足戒法」によって比丘となったということはほぼ間違いないであろう。この制度ができたのは釈尊46歳=成道12年の雨安居の後であるから、ヴァンギーサの出家・受戒はそれよりも後ということになる。

しかしヴァンギーサは釈尊に会って出家したとされているのも事実であるから、この両者を矛盾なく解釈するとすれば次のようになる。もし *Apadāna* がいうようにその場所が王舎城であったとするのを信頼するとすれば、ヴァンギーサは王舎城において舍利弗に紹介されて釈尊に会い、説法を聞いて即座に出家の決心をしたのである。おそらくそのときニグローダカッパも王舎城に滞在していて、釈尊はラーフラを舍利弗を和尚として出家させたり、阿難をベーラッタシーサ (*Belatṭhasīsa*) を和尚として出家させたように、この時はヴァンギーサをニグローダカッパを和尚として出家させたのである。このような解釈をパーリの註釈書も採用しているのである。ただしその場所を舎衛城としているが、ここでは原始聖典としての *Apadāna* の方を尊重することにする。

[4] それではヴァンギーサの和尚であるニグローダカッパとはどのような人物であったのであろうか。

[4-1] 詳細な資料があるわけではないが、ニグローダカッパが入滅した時に、ヴァンギーサの詩の中に次のように語られている。

Theragāthā vs.1263~1264: 世に知られ、名声あり、心が安らぎに帰した1人の修行者が**アッガーラヴァ (精舎)**で亡くなりました。(ブツダよ) あなたはそのバラモンに**ニグローダカッパ**という名をつけられました。

Suttanipāta vs.343~344: 同上

『雑阿含』1221 (大正02 p.333上): **曠野**住の比丘が命終して般涅槃しました。世尊は彼に**尼拘律想**と名づけられました。

『別訳雑阿含』255 (大正02 p.463上): 比丘が**曠野城中**において入涅槃しました。仏はこのバラモンのために**尼瞿陀劫賓**と名づけられました。

なお *Sutta-nipāta-A.* (1) では、ニグローダカッパという名前がつけられたのは、カッパがその名であって、ニグローダ樹の根元で阿羅漢果を得たがゆえであるとされている。

(1) vol. I p.346, 村上、及川訳 第2巻 p.600

[4-2] 以上のようにニグローダカッパという名は釈尊が名づけ親であったとされている。註釈書では阿羅漢果を得た時に名づけられたとしているが、むしろ出家した時のことと解釈した方がよいのではなかろうか。自然にそう呼ばれるようになったというのではなく、意識的に名づけられたとするならば、出家修行者としての誕生の時に名づけられるのが普通であるからである。釈尊がこのように名づけ親になるということが一般的であったのかどうかは詳らかにしないが、日本風にいえば僧侶になった時につけられる法名とか戒名に相当するであろう。このように考えることが許されるならば、ニグローダカッパは釈尊を和尚として「善来比丘具足戒」で出家受戒したということは間違いがなかろう。釈尊は晩年に至るまで「善来比丘具足戒」で自分の弟子を取られたから、これをもってニグローダカッパの出家年代を判断することはできないが、ここにはそのような特記はされておらず、もとより五比丘の1人でもなく、またヤサの友人でもなく、ニグローダカッパの出身地はアーラヴィーであったであろうから、ウルヴェーラーを本拠とする三迦葉の仲間でもなかったとも考えられるので、おそらく釈尊の善来比丘具足戒を受けて比丘となるのが常態であったガヤーシーサ時代のことであったのではなかろうか。アーラヴィーはパーラーナシーや王舎城とも近いから、直弟子たちが諸国に布教に出てアーラヴィーでニグローダカッパに出会い、ガヤーシーサに連れ戻って釈尊のもとで「善来比丘具足戒」を受けさせたのであろう。そのときにニグローダカッパという名がつけられたのである。

釈尊がガヤーシーサに留まって、諸国から直弟子たちが連れ帰る出家希望者に「善来比丘具足戒」を与えていたのは釈尊38歳=成道4年から釈尊43歳=成道9年までの6年間であるからその間ということになる。アーラヴィーはパーラーナシーや王舎城に近く、全国に布教にでた仏弟子たちも行きやすい土地であったであろうし、「能く偈頌を造り、如来の徳を嘆ずるものの第一」と称賛されるヴァンギーサの和尚となっていることなどを考慮するとそう遅くはなかったはずであるから、**ニグローダカッパの出家具足戒はその最初期の釈尊**

39歳＝成道5年のことであつたとしておく。

ニグローダカッパはその後10年ほど釈尊のもとで修行して、**釈尊49歳＝成道15年ころに独立すると、生れ故郷のアーラヴィーに戻って僧院を建て、弟子を取ることを始めたのではなかろうか。**

そして阿難が侍者に選任された**釈尊54歳＝成道20年の雨安居**を釈尊は王舎城で過ごされたが、この雨安居にはニグローダカッパも一緒に過ごした。その雨安居の前にヴァンギーサは釈尊に出家を願ひ出、**釈尊はヴァンギーサをニグローダカッパに委ねたので**あろう。そしてヴァンギーサはその年の雨安居を釈尊や阿難とともに過ごした。以後の項で考察するように、ヴァンギーサは釈尊や阿難と早くから面識があつたように感じられるのは、このようなヴァンギーサの出家の時の因縁があつたからであろう。

そしてこの**雨安居を終えると、ニグローダカッパはヴァンギーサを連れてアーラヴィーに帰つたのである。**

なお出家具足戒を受けた時ヴァンギーサは36歳になっていたとした。釈尊もすでに36歳になっている弟子を若い和尚に委ねることはできないし、以後に考察するように、これから間もなくしてニグローダカッパも入滅したのであるから、この時にはニグローダカッパもそれなりの年齢に達していたのであろう。とするならばニグローダカッパが出家具足戒を受けたのも、かなりの年齢に達してからのことであつたということになる。

[5] 次に出家直後のヴァンギーサについて考察する。

[5-1] 出家直後のヴァンギーサについて伝える資料には次のようなものがある。

SN.008-001 (vol. I p.185) : (仏在処なし) そのときヴァンギーサはアーラヴィーの
アッガーラヴァ塔廟 (0059) に (Āḷaviyaṃ Aggāḷave cetiye) 、和尚であるニグロー
ダカッパと共に (āyasmatā Nigrodha-kappena upajjhāyena saddhiṃ) 住していた。
このとき彼は出家して間もない新参者の頃で (navako hoti acirapabbajito) 精舎の留守番をしていた。そこへ多くの女性が着飾って精舎を見にやって来ると、彼に欲心が
起つた (rāgo cittaṃ anuddhamsesi) 。そこで彼は自らの欲心を滅ぼし、このことに喜びを感じて偈を誦した。(偈は省略)

Theragāthā vs.1209~1213 (p.109) : 上の偈に同じ (省略)

『雑阿含』1215 (大正02 p.331中) : 世尊は舎衛国祇樹給孤獨園におられ、一人の長者が世尊と比丘らを食事に招待した。婆耆舎は留守番をしていたが、そのとき多くの長者の婦女が精舎にやって来て、婆耆舎は年少の女人を見て欲心を起した。そこで彼はこれはよくないと反省して、今は遠離の偈を説かなければならないと偈を誦し(偈は省略)、心が安住した。

『別訳雑阿含』250 (大正02 p.461下) : 世尊は舎衛国祇樹給孤独園におられた。そのときある長者が仏および比丘らを招待して大会を行ったので、婆耆奢が留守番をしていた。そこへ多くの女人が訪れ、そのなかの1人の美しい女人に婆耆奢は心を乱し欲想を抱いた。彼は反省して厭惡の患を説かなければならないと偈を誦した。(偈は省略)

SN.008-002 (vol. I p.186) : (仏在処なし) ヴァンギーサはアラーヴィーのアッガーラヴァ塔廟に、和尚であるニグローダカッパと共に住していた。ときにニグローダカッパは乞食より帰った食後、精舎に入って夕刻あるいは翌朝まで精舎から出てこなかった。このときヴァンギーサに欲心が起った。そこで彼は自ら欲心を滅ぼし、このことに喜びを感じて偈を誦した。(偈は省略)

Theragāthā vs.1214~1222 (p.109) : 上の偈に同じ(省略)

『雑阿含』1213 (大正02 p.330下) : 世尊は王舎城の迦蘭陀竹園におられた。そのとき尊者尼拘律相は曠野禽獣の住処に住んでいた。尊者婆耆舎は出家して未だ久しからざる時で、聚落や城邑に依って住していた。婆耆舎は乞食して食後に入室坐禅していたが、彼には随時に教授し、教誡する者もいなかったのて心は安樂ではなかった。その時彼は今自ら厭離を讃嘆しようとして偈を唱えた(偈は省略)。これによって心は自ずから開覚し、心に喜びを生じた。

『別訳雑阿含』229 (大正02 p.457下) : 世尊は舎衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき婆耆舎は空静処にいて突如として異想が起き喜樂心がなくなり、善心を退失しそうになって、それでは出家ではないと厭患の偈を誦した。(偈は省略)

SN.008-003 (vol. I p.187) : (仏在処なし) そのときヴァンギーサはアラーヴィーのアッガーラヴァ塔廟に、和尚であるニグローダカッパと共に住していた。このとき彼は自分の弁才を誇り他の温和な比丘たちを軽蔑した (*attano paṭibhānena aññe pesale bhikkhū atimaññati*)。彼は自らそれを悔いて、「慢心を捨てよ、ゴータマ(の弟子)よ (1)。……」という偈を誦した。

Theragāthā vs.1219~1213 (p.110) の偈に相応する。

『雑阿含』1216 (大正02 p.331下) : 世尊は舎衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき婆耆舎は自ら善説に堪能なることをたのんで憍慢の心が生じた。そこで彼は、「瞿曇(の弟子)よ、慢を生ずること莫れ、慢を断じて余無からしめよ、……」という厭離を生ずる偈を誦し、心に清浄を得た。

『別訳雑阿含』251 (大正02 p.462上) : 世尊は舎衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき婆耆舎は有徳で柔軟な諸比丘のところへ憍慢心を起こした。これは出家者にあるまじきことだと反省して、慢心を厭悪する偈を誦した。「汝、諸慢を捨てよ、……」と。

(1) 註釈書は自分のことを *Gotama* と呼ぶのは、*Gotamabuddha* の弟子であるからであるとしている。しかしヴァンギーサが自身を *Gotama* と呼ぶのは、彼がゴータマを姓とし、したがって釈迦族であることを示すのかもしれない。

[5-2] これらはパ・漢よく相応するが、このうちのいくつかの経ではヴァンギーサは出家して久しからざる時と明示するし、またいくつかの経では和尚 (*upajjhāya*) であるニグローダカッパと一緒にあったとしている。「十衆白四羯磨具足戒法」が制定されて以降は、新参の比丘は原則として10年間は和尚の下で共住弟子 (*saddhivihārin*) として過ごさなければならないという規則であったから(ただし特別に優秀な者はこの期間を5年間に短縮できるとされている)、これはヴァンギーサが出家して少なくとも10年以内のことであったということを示すわけである。

またここではヴァンギーサ自身の告白の形で、女性を見て欲心を起こしたり、おとなしい比丘に対して傲慢心を起こしたりするという未熟さが正直に吐露されている。先にこのようないわば嫌らしさは中年のものであろうと推測した所以である。

とはいいいながら、ヴァンギーサが特別に煩惱が熾盛であったということではないかもしれない。ヴァンギーサは詩人であったから、自分の愚かさ醜さを素直に、少々は誇張して歌ったがゆえに、このような詩が残されることになったのであろう。むしろこのような心が生じることに自己嫌悪を覚え、強い反省心を起こす勝れた宗教家の資質を有していたとすべきであろう。

[6] このようにヴァンギーサが共住比丘として和尚のニグローダカッパと一緒に生活している時に、和尚のニグローダカッパは入滅した。

[6-1] これを伝える資料には次のようなものがある。

Suttanipāta 002-012 (p.059) : 世尊はアーラヴィーのアッガーラヴァ塔廟に住されていた。ヴァンギーサの和尚であるニグローダカッパ (Nigrodha-Kappa) という長老がこの塔廟において般涅槃して間がなかった。(āyasmato Vaṅḡisassa upajjhāyo Nigrodhakappo nāma therō aciraparinibbuto hoti)。そのときヴァンギーサに「私の和尚は般涅槃したのだろうか、それともしなかったであろうか (parinibbuto nu kho me upajjhāyo udāhu no parinibbuto)」という思いが生じた。そこで夕方、彼は独坐より出定して、世尊のもとにやって来て、偈をもって次のように質問した。「あなたが名前を付けられたニグローダカッパの梵行は空しかったのでしょうか、彼は寂滅に帰したのでしょうか、それとも有余だったのでしょうか (nibbāyi so ādu saupādiseso)、どのように解脱したのでしょうか (yathā vimutto ahu taṃ suṇāma)」と。これに対して世尊は、「彼はこの世において名色に対する渴愛を断ち切った。長夜の黒(魔)の流れを断ち切り、生と死を残りなく渡った (atāri jātīmaraṇaṃ asesam)」と説かれた。

Theragāthā vs.1263~1278 : 偈の部分のみであるが同上。

『雑阿含』1221 (大正02 p.333上) : 世尊は王舎城迦蘭陀竹園におられた。そのとき尊者尼拘律想は曠野禽獸の処に住んでいて病気になる。婆耆舎が看病人であったが、尼拘律想はこの病気のために般涅槃した。そのとき婆耆舎はわが和上は有余涅槃したのであろうか、無余涅槃したのであろうかという疑問を抱いた。そこで彼は尼拘律想の舍利を供養したのち、王舎城におられた世尊のもとを訪れて偈をもって質問した。

「曠野住の比丘が命終し般涅槃しました。世尊は彼に尼拘律想と名づけられました。彼の精進勤方便の功德を説いて下さい」と。世尊は「彼の梵行は空しくなかった。生死の彼岸を度して、また諸有を受けることはない」と答えられた。

『別訳雑阿含』255 (大正02 p.463上) : 世尊は王舎城迦蘭陀竹林におられた。そのとき尼瞿陀劫波比丘は第一曠野林中に住んでいて病気になった。婆耆奢耶旬が看病していたが、尼瞿陀劫波比丘は入涅槃した。そのとき婆耆奢は王舎城の世尊のところを訪ねて偈をもって質問した。「比丘が曠野城中において入涅槃しました。仏はこのバ

ラモンのために尼瞿陀劫賓と名づけられました（ここで切れている）」と。

[6-2] 以上のように、明らかに和尚のニグローダカッパはヴァンギーサが共住比丘として共住している時に入滅した。ニグローダカッパはもちろん弟子を独り立ちできるまで指導するつもりであったであろうが、弟子がまだ独立できていないときに亡くなったのであるから、思いもかけない死であったのであろう。先にも記したように、「十衆白四羯磨具足戒法」が制定されて以降は、新参の比丘は原則として10年間は和尚の下で共住弟子として過ごさなければならないという規則であったから、和尚の死去はヴァンギーサが出家・受戒を受けて10年以内のことであったということになる。

そして和尚と弟子の制度では、もし共住弟子 (saddhivihārika, saddhivihārin) として和尚に依止している時に、和尚 (upajjhāya) が死亡したり、還俗したりするようなことがあった場合には、残りの期間を他の長老比丘を阿闍梨 (ācariya) として、そのもとで内住弟子 (antevāsika, antevāsin) として教育を受けなければならないという決まりであった。

これもまったくの推測であるが、ニグローダカッパが急死したのはヴァンギーサが比丘となって5年後の釈尊59歳＝成道25年のころ（ヴァンギーサは41歳ほどになっていた）であったと考えれば、通常の規定からいえば、ヴァンギーサは和尚の代りに新しい阿闍梨を求めなければならないということになる。そしておそらくこの阿闍梨に釈尊がなされたのではなかろうか。もともとヴァンギーサがニグローダカッパを和尚としてその共住弟子になったのは、釈尊の命令であったからである。そこで彼は和尚のニグローダカッパが亡くなると、直ちに釈尊のところへ赴いた。それが上に紹介した経である。そしてそのときに、ニグローダカッパの涅槃の内容が、完全なる涅槃であったのか、それともなお残余がある涅槃であったのかと尋ねたのである。このような質問をすること自体、彼の心境がまだ高まっていなかったことを推測せしめる。

そして彼は釈尊を阿闍梨とする内住弟子となることを許され、「ブッダを上首とするサンガ」の一員に参加することになった。「ブッダを上首とするサンガ」は釈尊と起居を共にするから、このサンガの一員になるということは、釈尊のところを訪れる舍利弗を始め、多くの大長老たちと会う機会に恵まれるということの意味し、また釈尊とともに方々に遊行することを意味するから、そこで以下で紹介するような多くの偈を誦することができるようになったのである。したがってこれがヴァンギーサが詩人として認められる最大の要因となったということもできる。なおこれ以前の彼の詩は、すべて彼が感興に任せて誦したウダーナのようなものであるが、これ以降の詩は、釈尊の前で釈尊の許しを得た上で誦することが多くなった。以下の資料では、これを注意して記した。

[7] 次に「ブッダを上首とするサンガ」のなかで、釈尊の内住弟子として生活していた時代のヴァンギーサを検討する。

[7-1] 釈尊の内住弟子となったとはいえ、当初のヴァンギーサは相変らず絶えず起きる欲心に悩まされていた。次の資料はそれを物語る。

SN.008-004 (vol.I p.188) : (仏在処なし) 阿難は舎衛城祇樹給孤独園に住していた。ときに阿難はヴァンギーサを随従沙門 (pacchāsamana) として舎衛城に乞食した。

そのときヴァンギーサに欲心が起った。そこで彼は阿難に偈をもって「ゴータマよ、私を憐れんで火を消し止める法を説いて下さい」と誦した。阿難は「顛倒の想によって汝の心は燃えている。欲情を呼び起す美しき相を避けよ。諸行を他から生じたものと見よ。苦であり、自から生じたものに非ずと見よ。不浄相、無相を修めよ。慢随眠を捨てよ。これにより寂静となる」という偈を誦した。

Theragāthā vs.1223~1226 : 同上の偈

『雑阿含』1214 (大正02 p.331上) : 世尊は舍衛国祇樹給孤独園におられた。あるとき阿難は晨朝に婆耆舎を伴となして舍衛城内に乞食した。そのとき婆耆舎が美しい女人を見て欲心を起した。そこで婆耆舎は偈をもって阿難に貪火を滅する方法を説いてほしいといった。阿難は「彼の顛倒想を以て熾然として其の心を焼く、浄想の貪欲を長養するを遠離して、当に不浄観を修して常に一心を正受すべし」という偈を誦した。

『別訳雑阿含』230 (大正02 p.458上) : 世尊は舍衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき婆耆舎は阿難と一緒に乞食に町に入ったが、1人の年盛壯なる美しい女人を見て欲心を起し、こんなことでは出家ではないと考えて、偈をもって阿難に欲を除く方法を説いてほしいといった。そこで阿難は不浄観を修すべきことなどの偈を誦した。

『増一阿含』035-009 (大正02 p.701上) : 世尊は500人の比丘らと共に羅闍城の迦蘭陀竹園に住された。あるとき阿難は多耆耆とともに城内に乞食に入った。そのとき多耆耆は端正な女性を見て心を乱した。そこで多耆耆は阿難に欲火を滅する方法を説くことを偈をもって頼んだ。阿難は偈をもってこれに答えた。彼はこの欲が思想(表象作用)より生ずると思惟して心解脱を得た。多耆耆は乞食を終えたのち世尊のもとにやって来て「五盛陰は眞実ではない」と偈をもって語った。世尊はこれを是認された。

[7-2] このようにヴァンギーサは「ブッダを上首とするサンガ」の一員になったとはいえ、初めのころは欲心に悩まされていた。しかし「ブッダを上首とするサンガ」の一員になったがゆえに阿難とのつきあいができるようになった。このことを上の資料は示しているわけである。

また彼は阿難の随従沙門として乞食し、阿難に教を請うているのであるから、阿難よりも法臘は短かった。ヴァンギーサが具足戒を受けたのは釈尊54歳=成道20年の雨安居前のことで、この年の雨安居後に阿難は長老の1人として、「釈尊のサンガ」の秘書室長に任命されているのであるから当然である。ちなみにヴァンギーサがこの「ブッダを上首とするサンガ」に加入したのは釈尊59歳=成道25年くらいのころのことであつたとしたが、そのとき阿難は36歳、ヴァンギーサは41歳になっていた。したがって生理的にはヴァンギーサの方が年長であつたが、ヴァンギーサは吟遊詩人として全国を遍歴した期間が長かつたので、法臘としては阿難のほうが上であつたのである。したがってこの時はヴァンギーサは阿難に兄事していたということになる。

[8] ヴァンギーサが修行の果報を得るのは今しばらくの期間を必要としたようである。しかし「ブッダを上首とするサンガ」の一員として、多くの大長老に接する機会を得、また釈尊に随従してさまざまなところに遊行したので、多くの詩を誦すことができた。

[8-1] 以下にその詩の数々を紹介する。

SN.008-006 (vol. I p.189) : (仏在処なし) そのとき**舍利弗**は**舍衛城の祇樹給孤独園**に住しており、比丘たちに説法をした。そのときヴァンギーサは座を立ち舍利弗の許しを得て、彼に向って、「大いなる智慧ある舍利弗は、比丘らに法を説く。比丘らは心歓喜し、満たされて、耳を傾けた」という讃歎の偈を誦した。

Theragāthā vs.1231~1233 (p.110) : 同上の偈

『雑阿含』1210 (大正 02 p.329 中) : 世尊は**瞻婆国の揭伽池の側**に住された。**舍利弗**は供養堂で比丘らに説法した。このとき婆耆奢は舍利弗の許しを得て、彼を讃歎して、「善能く法を略説し、衆をして広く開解せしむ。賢なる優婆提舍、大衆に於て宣暢す」という偈を唱えた。

『別訳雑阿含』226 (大正 02 p.456 下) : 世尊は**舍衛国祇樹給孤独園**におられた。そのとき**舍利弗**は講堂で説法した。婆耆奢は舍利弗の許しを得て、彼をほめて「舍利弗はすばらしい」という偈を誦した。

SN.008-009 (vol. I p.193) : 世尊は**王舍城竹林園**におられた。**アンニャー・コンダンニャ** (Aññasi-koṇḍañña) が久しぶりに (sucirass' eva) (1) 世尊のもとを訪れ、五体投地の礼をなし、「世尊私はコンダンニャです (Koṇḍañño-haṃ Bhagavā Koṇḍañño-haṃ Sugata)」と世尊に挨拶した。これを見たヴァンギーサは世尊の許しを得て、「仏について悟り、三明に達し、他心智に巧みであって、ブッダの後継者 (buddha-dāyāda) である上座コンダンニャは、今師のみ足を頂礼している」と、彼を讃えて偈を誦した。

Theragāthā vs.1246~1248 (p.111) : 同上の偈

『雑阿含』1209 (大正 02 p.329 中) : 世尊は**瞻婆国の揭伽池の側**に住された。ときに**阿若憍陳如**が久しく空閑阿練若の住処に住んで、世尊を拜謁するためにやって来て、仏足に稽首して「世尊に久しくお会いしませんでした」と挨拶した。これを見ていた婆耆奢は世尊の許可を得て、「上座の阿若憍陳如は、仏法の財を護持し、恭敬心を増上して、頭面に仏足を礼せり」という偈を誦した。

『別訳雑阿含』225 (大正 02 p.456 下) : 世尊は**舍衛国祇樹給孤独園**におられた。そのとき世尊は大衆に圍繞されて説法されていたが、その中に**憍陳如**がいた。憍陳如はたまたま余処からやって来たのであった。このとき婆耆奢は世尊の許しを得て、**憍陳如**を「如来の長子」と誉め称える偈を唱えた。

SN.008-008 (vol. I p.192) : そのとき世尊は**舍衛城祇樹給孤独園**に住された。1,250人の比丘たちと一緒にあり、世尊は比丘らに涅槃に導く法話をされた。そこでヴァンギーサは世尊の許しを得て世尊を讃歎して、「比丘衆にかこまれて正覚者は輝く。世尊は大雨のごとく弟子たちを潤したまう」と偈を唱えた。世尊は彼に、「これらの偈は前から考えていたものか、それとも今思い浮かべたものか」と質問された。「前に考えおいたものではありません。今私に思いつかれたものです」と答えると、世尊は「そうならば、さらに説け」と促された。ヴァンギーサは「光明となれる人は徹見して、一切の見処を超えたものを見られた。最上のものを知り、作証して、我らに十処

を説かれた。このように法が善く説かれたときに、法を了知した者のうちで誰が放逸となろうか。不放逸にして、常に礼拝して随学せよ」という偈を唱えた。

Theragāthā vs.1238~1245 : 同上の偈

『雑阿含』1218 (大正02 p.332上) : 世尊は舎衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき世尊は比丘らに「賢聖の善説法は、是れ則ち最上となす。愛説にして愛せざるに非ず、是れ則ち第二となす。諦説にして虚妄に非ず、是れ則ち第三の説となす。法説にして異言せず、是れ則ち第四となす」と偈をもって四法句を説かれた。そのとき婆耆舎はこの教えを聞き、世尊の許しを得て、「仏の説かれた法は安穩涅槃への道で、一切苦を滅除する善説法である」と四法句を讃嘆する偈を唱えた。

『別訳雑阿含』253 (大正02 p.462中) : 世尊は舎衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき世尊は比丘たちに「四句偈法」を説かれた(細部は省略)。そのとき婆耆舎はこれを知り、世尊の許しを得て、「仏の所説は必ず安樂を得、涅槃に趣き、諸々の苦を断じる善説である」と、讃嘆する偈を誦した。

SN.008-005 (vol. I p.188) : 世尊は舎衛城祇樹給孤独園におられた。世尊は比丘たちに「4つの特徴を具えた言葉とは、①善説を語り悪説を語らず、②法を語り非法を語らず、③愛語を語り非愛語を語らず、④真実を語り虚偽を語らず、である。これらは諸々の智者に非難されないものである」と説かれた。これを聞いてヴァンギーサは世尊の許しを得て、世尊に向かって、「仏の説かれた言葉は、涅槃の安穩に達するために、苦を滅尽させるために無上のものである」という讃嘆の偈を誦した。

Suttanipāta 003-003 vs.451~454 : 略同

Theragāthā vs.1227~1230 : 同上の偈

『雑阿含』1220 (大正02 p.332下) : 世尊は波羅奈国の仙人住处鹿野苑に住された。そのとき世尊は比丘らに四聖諦の教えを説かれた。ときに婆耆舎が世尊の許しを得て、「諸医の来会せる者、我れ今悉く汝に告ぐ、甘露法を得、樂う所に随いて服せ、第一の利箭を抜きて、善く衆病を覚知せん、治中の最上なるが故に瞿曇に稽首す」という讃偈を誦した。

『別訳雑阿含』254 (大正02 p.462下) : 世尊は舎衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき世尊は比丘らに世には四病を能治する良医があるが、仏もまた四種の法を成就するとして、四毒箭喩法(①病氣、②病氣の原因、③病氣の治癒、④更に生ぜざるを知る。即ち四諦の教え)を説かれた。婆耆舎はこの教えを讃嘆する偈(省略)を誦した。

SN.008-011 (vol. I p.195) : 世尊はチャンパーのガッガラー蓮池の畔に(Campāyaṃ Gaggarāya pokkharāṇiyā tire)、500人の比丘と700人の優婆塞と700人の優婆夷と幾千の神々と共に住された。そのときヴァンギーサは世尊の許しを得て、世尊を讃嘆して、「あたかも雲なき天空に月が無垢なる太陽のように輝く。そのように、アンギーラサよ、大牟尼よ、あなたも名声によって一切世間を超えて輝く」と偈を誦した。

Theragāthā v.1252 : 同上の偈

『雑阿含』1208 (大正02 p.329上) : 世尊は瞻婆国の揭伽池の側に住された。その日は十五日の布薩であった。月の初出のときに、大衆の前に坐されている世尊に許しを得

ると、婆耆舎は「月の虚空に停まるに、明浄にして雲翳なく、光炎は明らかに暉曜して、普く十方を照すが如く、如来もまた是の如く、慧光世間を照し、功德の善き名称、周遍して十方を満たす」と、世尊の威徳を讃歎して偈を誦した。

『別訳雑阿含』224 (大正02 p.456中) : 世尊は薩婆国の竭闍池の岸に居られた。その日は月の十五日の満月で、世尊が比丘らの前で説戒されていた。月の初出の時、婆耆舎は世尊に許しを得て、世尊と比丘らを、「雲のない虚空の中の満月のように世界を照らす」と讃偈を誦した。

- (1) アッタカターでは、「久しぶりに」というのは「12年ぶりに (dvādasannaṃ saṃvaccharānaṃ)」としている (SN.-A. vol. I p.276、片山一良訳「相応部 有傷篇 II」p.445 参照)。ただしパーリの註釈書は成道後のちょうど満1年後に釈尊はカピラヴァットゥに帰られたという解釈をもとにしているため、われわれの釈尊の年代記の考え方はまったく異なる。

[8-2] 以上のように舍利弗やアンニャー・コンダンニャや、次項にも紹介するように数多くの上座比丘が讃歎されている。またその場所も舎衛城、王舎城、チャンパー、バーラーナシーなど区々である。釈尊は諸国から遊行してくる比丘らに会われるとともに、雨安居を過ごされたいという要請を受けて方々に遊行されたから、それが反映しているわけである。前項に書いたように、これはヴァンギーサが「ブッダを上首とするサンガ」に所属して、釈尊とともに行動したことの賜物である。

[8-3] なお『別訳雑阿含』224 (1) では、釈尊自身が布薩の日に説戒されたとしている。「ブッダを上首とするサンガ」では、布薩の日には釈尊自身が波羅提木叉を誦されていたのである。しかしながら Udāna 005-005 (2)、AN.008-002-020 (3)、『パーリ律』「遮説戒犍度」(4)、『四分律』「説戒犍度」(5)、『五分律』「遮布薩法」(6)、『増一阿含』048-002 (7)、『十誦律』「遮法」(8) などでは、ある事件をきっかけに釈尊は弟子たちが「今からは自分たちで波羅提木叉を説け」と定められたとされている。したがってこの『別訳雑阿含』224はこれが自分たちで波羅提木叉を説けと定められる前のことであったということになる。

とはいいいながら、これがいつのことであったのかは明らかではない。『増一阿含』の仏在処は舎衛城の祇樹給孤独園、『十誦律』は瞻波国になっているが、パーリの3つの資料はすべて舎衛城の東園鹿子母講堂になっているから、もしこれを採用するとすれば、波羅提木叉を弟子たちが誦すようになったのは東園鹿子母講堂が寄進された釈尊68歳=成道34年よりも後のことということになり (9)、この『別訳雑阿含』224はそれよりも前のことを描いているということになる。

なおついでになぜ釈尊自身が波羅提木叉を誦さないで、弟子たちに誦させるようになったかという理由を考えておこう。この因縁は次のようなものであった。布薩の日に釈尊は比丘たちに圍繞されて坐っておられたが、初夜になり、中夜になって、阿難が「比丘のために波羅提木叉を説いて下さい」と促しても、釈尊は黙然とされているのみであった。そして後夜にいたっていたたまれなくなった阿難が釈尊に、三度目に「比丘のために波羅提木叉を説いて下さい」と促すと、世尊は「この集会に不浄な者がいる」と告げられた。そこで目連が破戒不浄の比丘を見つけ、その人のところへ行って「共住してはならぬ」と3度告げて門外に

追い出した。そのとき釈尊は、「今より以後、そなた達が自ら布薩を行い、波羅提木叉を誦しなさい」と定められたとするのである。

布薩は波羅提木叉が説かれた時、波羅提木叉に照らし合わせて自ら気づいていなかった罪を気づかせ、自分で告白することを促す制度である。しかしながら波羅提木叉を誦す前に、釈尊のように衆中に不浄な者がいることを気づいてしまうと、波羅提木叉を読んで気づかせ、自ら告白させるという布薩の機能がなくなってしまう。そこで釈尊は波羅提木叉は弟子たちが誦すべきと考えられたのではなかろうか。

(1) 大正 02 p.456 中

(2) p.051

(3) vol.IV p.204

(4) *Vinaya* vol. II p.236

(5) 大正 22 p.824 上

(6) 大正 22 p.180 下

(7) 大正 02 p.786 上

(8) 大正 23 p.239 中

(9) 本「モノグラフ」の【研究ノート 1】「釈尊のアンガ (*Āṅga*) 国訪問年の推定」では、「釈尊の晩年に属することになるが、この時まで釈尊が波羅提木叉を誦されていたとするのも不自然で、これでは遅すぎるであろう」と記しておいた。p.020

[9] 以上のようにヴァンギーサは煩惱が深いことに悩んでいたが、遂には阿羅漢果を得ることになった。

[9-1] これを伝える資料には次のようなものがある。

SN.008-012 (vol. I p.196) : 世尊は舍衛城祇樹給孤独園におられた。そのときヴァンギーサは阿羅漢果を得て間もなくで (*acira-arahattappatto hutvā*)、解脱の樂を味わいつつ、「私は以前には詩作に耽って、村より村、町より町を彷徨っていたが、正覚者を拝見して正信を生じた。世尊は私に蘊・処・界の法を説かれた。私はその教えを聞いて出家した。よくも私はブツダのおそばに来たものだ。私は宿命を知り、三明と神通を得、他心智に巧みである」という偈を誦した。

Theragāthā vs.1253~1262 (p.112) : 小異はあるが同上の偈

『雜阿含』1217 (大正 02 p.331 下) : 世尊は舍衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき婆耆舎は東園鹿子母講堂に住し、不放逸に住して三明を逮得し、身に作証した。そこで婆耆舎は三明を讚嘆して、「本欲心もて狂惑し、聚落及び家々に遊行したが、遇ま仏を見るに、瞿曇は哀愍せしが故に、我がために正法を説かれた。そこで出家して勤方便し、三明を逮得した」という偈を誦した。

『別訳雜阿含』252 (大正 02 p.462 上) : 世尊は舍衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき婆耆舎は閑静処に独居して精進・不放逸の結果三明を得て、「私は昔荒酔のごとく諸々の城邑を遍歴していたとき仏に会った。瞿曇は悲愍して私に正法を説いて下さり、清浄信を得て出家した。私は不放逸を修して三明を得た」と、三明を誉め称える偈を誦した。

[9-2] 以上のようにヴァンギーサは阿羅漢果を得、三明を得たとされるのであるが、こ

これらの経にその時期を明示するような情報は含まれていない。しかし状況判断をすれば、ヴァンギーサが「ブッダを上首とするサンガ」に加入したのは、具足戒を受けて満5年がたった釈尊59歳＝成道25年のころ（ヴァンギーサは41歳ほどになっていた）であったとしたから、なおその後5年間は内住弟子として釈尊に給仕したであろうと推測される。もっともその間に阿羅漢果を得るということがないわけではないが、前項に見たように、「ブッダを上首とするサンガ」には決して短くはないそれなりの期間所属していて、だからこそその間に数々の偈を誦したのであるから、その期間ははまだ阿羅漢果を得ていなかったと考えてよかろう。もし阿羅漢果を得たなら、その時点で依止を離れることができるのであるから、内住弟子の身分を脱して独立した長老比丘となっているはずであるからである。したがって阿羅漢果を得たのは少なくとも釈尊64歳＝成道30年以降ということになる。

また終りの方からいえば、彼は以下に記すように東園鹿子母講堂で亡くなっているから、少なくとも東園鹿子母講堂が寄進された以後まで生きていたことになる。先に記したように東園鹿子母講堂が寄進されたのは釈尊68歳＝成道34年の雨安居前のことであったから、少なくともそれまでは生存していたのである。

またさらにいえば、[10]で検討するように、彼は東園鹿子母講堂で釈尊に会ってから亡くなっているから、可能性としては、釈尊が舎衛城での最後の雨安居を過ごされた釈尊77歳＝成道43年までは生きていたことになる。しかし議論を先取りするならば、[10]での結論はヴァンギーサの死亡は釈尊73歳＝成道39年の雨安居中であるから、したがって彼が阿羅漢果を得、三明を得たのは、釈尊64歳＝成道30年から釈尊73歳＝成道39年までの間のことになる。ヴァンギーサの年齢からいえば46歳から55歳までのことである。何の根拠もないが中間をとって、**ヴァンギーサが阿羅漢になったのは釈尊69歳＝成道35年のこと**としておきたい。そのときヴァンギーサはすでに51歳になっていた。

とするならば[7-1]で紹介した経はすべて、ヴァンギーサが「ブッダを上首とするサンガ」に参加してから、阿羅漢果を得るまでの**釈尊59歳＝成道25年から釈尊69歳＝成道35年までの経**ということになる。

[10] ヴァンギーサは阿羅漢果を得て以降も詩作を続けた。

[10-1] このような詩には次のようなものがある。

SN.008-007 (vol. I p.190) : 世尊は舎衛城・東園鹿子母講堂に500人の阿羅漢比丘たちと共に居られた。その日は布薩の15日で自恣にあたっていたので、世尊は比丘たちに囲まれて露地に坐された。ときに世尊は比丘たちに、「比丘らよ私は自恣します (handā dāni bhikkhave pavārayāmi)。私の身・語の上に何らかの非難されるべきことがあるだろうか」と告げられた。このように言われて舍利弗は座を立ち、一肩に衣をかけ、合掌して世尊を礼して、「いいえ、世尊には身・語ともに非難するようなものはありません。世尊よ、私もまた世尊に自恣します (ahaṃ ca kho bhante bhagavantam pavāremi)。私にも身・語の上に何らかの非難されるべきことがあるのでしょうか」と言った。世尊は「そなたの身・語に、何ら非難されるべきことはない。この500人の比丘たちにもない。このうち60人は三明を得た者、60人は六神通を得

た者、60人は俱解脱を得た者、他は慧解脱を得た者である」と答えられた。このときヴァンギーサが世尊の許しを得て、「すべて世尊の子であり、駄弁を弄するものはない。渴愛の矢を打ち砕いたもの、太陽の後裔を礼拝したてまつります」と偈を唱えた。

Theragāthā vs.1234~1237 (p.111) : 同上 の偈

『雑阿含』1212 (大正02 p.330上) : 世尊は王舎城竹林園で雨安居を過ごされた。500人の比丘たちと一緒に、500人は阿難を除いてすべて阿羅漢であった。世尊は15日の自恣に「自分の身・口・心に嫌責すべきところはなかったか」と尋ねられた。ついで舍利弗が「世尊にお伺いします。自分の身・口・心に嫌責すべきところはありませんでしたか」と問うと、世尊は「見聞疑において、嫌責すべきところはない」と答えられた。次いで他の比丘らが次々に尋ねた。ときに世尊は「この集団の中で90人は三明、90人は俱解脱、残りの者は慧解脱を得ている」と告げられた。そのとき婆耆奢は世尊の許しを得て、今、ここでなされた自恣を讃え、偈を誦した。(偈は省略)

『別訳雑阿含』228 (大正02 p.457上) : 世尊は王舎城迦蘭陀竹林園において、すべてが阿羅漢の500人の比丘たちと夏安居を過ごされ、自恣となった。そのとき世尊は、「私は自恣をしたい。我が身・口・意において過失はなかったか」と尋ねられた。舍利弗が「我ら仏弟子に如来の身・口・意に少しの過失も見ません」と答えた。舍利弗も「世尊よ、私にもし身・口・意に欠けるところがあったら、教えてください」といい、世尊は「そのようなものは見ない。なぜならこの衆中の90人は三明、180人は俱解脱、残りは慧解脱を得ている」といわれた。婆耆奢は世尊の許しを得て、自恣をほめた偈を誦した。(偈は省略)

『増一阿含』032-005 (大正02 p.676中) : 世尊は舎衛城の東苑鹿母園に500人の比丘らと共に居られた。このときは7月15日であったので、世尊が露地に於て、阿難に「撻椎を打て。今日は7月15日受歳日である」と命じられた。阿難が「世尊は染著がない。なぜ受歳を受けるのですか」と偈で尋ねた。世尊は、「受歳は三業を浄む、身・口・意の所作なり。両々の比丘がお互いに、自らなした所の短を陳ぶ。還って自ら名字を称して、今日、衆歳を受けんと。我も亦た、意を浄めて受けん。唯だ願わくば、其の過をたずねよ。これは過去恒沙の仏が行ってきたことである」と偈を説かれた。諸弟子が悉く集まると、世尊は「私は今から受歳を受ける。私に衆人において過咎がなかったか、身・口・意において犯すところはなかったか」と言われた。諸比丘は黙然としていた。そのとき舍利弗が、「世尊は今だ解脱しない者には解脱させるような方です。世尊に過咎や身・口・意の犯があるはずはありません」といった。それから舍利弗も「私は如来および比丘僧において過咎がなかったか、身・口・意において犯すところはなかったか」といった。このとき多耆奢が世尊の許しを得て、仏および僧伽を称讃する偈を誦した。そこで世尊は比丘らに「我が声聞中で、第一の造偈の弟子は、多耆奢である」と語られた。

『中阿含』121「請請経」(大正01 p.610上) : 世尊は王舎城迦蘭陀竹林園において500人の比丘らと共に夏坐を受けられた。その日は月の15日(布薩)に当たったので、

世尊は從解脱を説かれた。そして比丘らに向って「我、今、最後身にして再び生を受けることなし。汝らは我が真の子なり。口より而も生ぜる法にして法に化せらる。汝ら当に教化して転た相教誨すべし」と説かれた。次いで世尊は**舍利弗**に解脱者の数を問われたので、「90人の比丘が三明を得、90人の比丘が俱解脱を得、他の比丘が慧解脱を得ている」と答えられた。このとき傍者舎が世尊に讃偈を唱えることを願い出ると、世尊はこれを許可された。そこで傍者舎は「今、十五請日に、集坐せる五百の衆は、諸の結縛を断除し、無礙有尽の仙なり」という偈を唱えた。

『雜阿含』1219 (大正 02 p.332 中) : 世尊は王舎城の那伽山の側に、すべて阿羅漢の1000人の比丘らと共に居られた。そのとき王舎城の寒林にいた婆耆舎は、世尊および諸比丘を讃嘆したいと世尊のところに訪れて讃嘆の偈を述べ、世尊の説法を願い出た。世尊は「あなたが思うところに従うように」と答えられた。そこで彼は、世尊と比丘らの威徳をさらに称讃して偈を誦した。諸々の比丘らは大いに喜んだ。

SN.008-010 (vol. I p.194) : 世尊は王舎城のイシギリ山側のカーラシラー (黒石窟) に (Isigiripasse Kāḷasilāyam) 、500人の比丘らと住された。すべて阿羅漢であった。そのとき**目連**は神通力で、比丘らの心が解脱していることを知った。これを知ったヴァンギーサは世尊の許しを得て、「苦悩の彼岸に達せられた聖者を、三明に達した弟子らは敬礼する。大神力を有している大目連は他の人々の心を知った」という偈を誦した。

Theragāthā vs.1249~1251 (p.112) : 同上の偈

『雜阿含』1211 (大正 02 p.329 下) : 世尊は王舎城の那伽山の側に、500人の比丘らと共に居られた。彼らはすべて阿羅漢であった。そのとき**目連**は500人の比丘がすべて阿羅漢であるのを神通力で知った。ときに婆耆舎は世尊の許しを得て、目連の神通力と比丘らの威徳を称讃して偈を唱えた。(偈は省略)

『別訳雜阿含』227 (大正 02 p.457 上) : 世尊は王舎城の龍山側に500人の比丘とともにおられた。彼らはすべて阿羅漢であった。そのとき**目連**は500人の比丘がすべて阿羅漢となっているのを神通力で見た。その日は月の半ばで、まさに説戒されようとしたとき、婆耆舎は世尊の許しを得て、目連をほめて偈を誦した。(偈は省略)

『雜阿含』993 (大正 02 p.259 上) : 世尊は舎衛城祇樹給孤独園におられ、上座の比丘、即ち**阿若憍陳如、摩訶迦葉、舍利弗、目連、阿那律、守籠那、陀驪摩羅子、婆那迦婆娑、耶舎舎羅迦毘訶利、富留那、分陀檀尼迦**を左右に随えておられた。そのとき婆耆舎は舎衛国の東園鹿子母講堂にいたが、上座比丘らを讃歎しようと考えて世尊のもとにやって来た。そして「上の上座比丘は、已に諸の貪欲を断じ、諸の世間の一切の積聚に超過し、深智ありて言説少なく、勇猛に勤め方便し、道德淨く明らかに顕わる。我、今稽首して礼す」という讃偈を誦した。

『別訳雜阿含』256 (大正 02 p.463 中) : 世尊は舎衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき諸大声聞はそれぞれ菴窟を作って住していた。すなわち、**憍陳如、頗発**(ヴァッパ)、**耆賢**(アッサジ?)、**跋溝**(バディヤ)、**摩訶南**(マハーナーマ 以上五比丘)、**耶舎、那毘摩羅、牛呵、尊者・舍利弗、目連、摩訶迦葉、摩訶俱絺羅、**

摩訶劫賓那、尊者・阿那律、尊者・難陀迦、尊者・鉗比羅 (Kambila)、耶舍餘羅俱毘訶、富那、拘毘羅、拘婆尼泥迦他毘羅である。その日は月の15日布薩であったので、如来は衆僧の前に坐られた。そのとき尊者・婆耆奢は座を起ち、世尊の許しを得て、「これらの比丘は一切の垢穢を離れ、點慧を有するがゆえに大比丘と呼ばれる」という偈を誦した。

[10-2] 以上の経に含まれる仏弟子たちはすべて阿羅漢もしくは解脱者であったとされている。そしてその1員としてヴァンギーサもいるのであるから、彼もまた阿羅漢であったことになる。これらはすべて**釈尊69歳＝成道35年からヴァンギーサ入滅の釈尊73歳＝成道39年の雨安居までの経**であるということになる。

なお前半にあげた SN.008-007などの資料では、釈尊自身も自恣を行い、ご自分に「身・口・意において過ちがなかったか」と比丘らに問いかけられている。釈尊も「ブツダを上首とするサンガ」の一員であったことを明示しているわけである。

[11] 最後にヴァンギーサの入滅年を検討する。

[11-1] ヴァンギーサの入滅を伝える経には次のようなものがある。

『雜阿含』994 (大正02 p.259下) : 世尊は舍衛国祇樹給孤独園におられた。婆耆奢は東園鹿子母講堂にいたが病気に罹り、富隣尼が看病していた。そのとき婆耆奢は富隣尼を世尊のもとへ遣わし、「世尊にお目にかかりたいのだが病気のためにそれがかなわない。哀愍をもって東園鹿子母講堂にお越しいただきたい」と願い出た。世尊はこれを黙然として許され、彼のもとに向われた。彼は最後のお願ひとして偈を聞いていただきたいと偈を誦した⁽¹⁾。(偈は省略)

『別訳雜阿含』257 (大正02 p.463中) : 世尊は舍衛国祇樹給孤独園におられた。婆耆奢は毘舍佉鹿子母講堂にいて病気に罹った。そのとき婆耆奢は看病していた富匿を病気で起居ができないのでお越しいただきたいと世尊のところへ使いに出した。世尊は彼のもとに向われた。婆耆奢は「今日、私は涅槃に入るので、最後に世尊を讃歎したい」と許しを得て、偈を誦した。(テキストにおいても偈は省略されている)

(1) 『雜阿含』1265 (大正02 p.346中) : (登場人物: 跋迦梨、富隣尼) 世尊は王舎城・竹林園におられた。跋迦梨は、王舎城の仙人山側黒石室で病に罹り苦しんでいた。そこに富隣尼がやって来て彼を看護する。彼は富隣尼に釈尊を連れてくるように依頼する。釈尊は彼の願ひを受け入れて赴かれる。釈尊は病に苦しんでいた跋迦梨に、「五蘊は無常であって苦である」と説かれたあと、その場を立ち去られた。彼が自害したことを知った釈尊は、再びこの地を訪れ、彼のために記別を与えられる。なお、この経の主人公は跋迦梨であってヴァンギーサではない。しかし富隣尼が登場するので、何らかの関係があるかもしれない

[11-2] 以上のようにヴァンギーサは東園鹿子母講堂において病気で亡くなったとされている。東園鹿子母講堂は舍衛城の東門近くにあり、祇園精舎は南門近くにあったのであるから、そう遠くもない祇園精舎におられた、そのときにはおそらくすでに老齢になられていたであろう釈尊に、わざわざお越し願ひたいというのであるから、ヴァンギーサはすでに瀕死の状態であったのであろう。もちろんこのころは「ブツダを上首とするサンガ」から離れて、独り立ちした長老となっていたから、釈尊とは別のところに住していたのである。

ところで東園鹿子母講堂は釈尊 68 歳＝成道 35 年の雨安居前に寄進されたのであるから、彼の入滅はそれ以降ということになる。われわれはこの年以降に釈尊が舎衛城で雨安居を過ごされたのは釈尊 70 歳＝成道 36 年と釈尊 77 歳＝成道 43 年の 2 年と考えている。ただし 71 歳、73 歳はいまだその雨安居地を推定しきれていない。ただし 70 歳は舎衛城であるとする、2 年続きで舎衛城に雨安居されるようなことはなかったであろうから、残るは 73 歳＝成道 39 年の雨安居である。また 77 歳ではあまりに遅きにすぎるから、とりあえず、**釈尊は 73 歳＝成道 39 年の雨安居は舎衛城で雨安居を過ごされ、その雨安居中にヴァンギーサは入滅した**と考えておく。ヴァンギーサは釈尊 54 歳＝成道 20 年に 36 歳で具足戒を得ているから、入滅はそれから 19 年後の 55 歳であったということになる。

[12] 以上のまとめに代えて、各項において下しておいた結論を略年表にまとめてみると次のようになる。表中の「V.」というのは「ヴァンギーサ」の略である。

釈尊	成道年	阿難	V.	記事
39 歳	5 年			ニグローダカッパ、ガヤーシーサにおいて釈尊より善来比丘具足戒によって仏弟子となる。
49 歳	15 年			ニグローダカッパ、生まれ故郷のアーラヴィーに戻って僧院を建てる。
54 歳	20 年	31 歳	36 歳	雨安居前に、釈尊はヴァンギーサにニグローダカッパを和尚として出家具足戒を与えさせる。 この年の雨安居を、釈尊、阿難、ニグローダカッパ、ヴァンギーサともに王舎城で過ごす。 雨安居の後、ニグローダカッパはヴァンギーサを連れてアーラヴィーに戻る。
59 歳	25 年	36 歳	41 歳	ニグローダカッパ、アーラヴィーにおいて入滅する。これにともないヴァンギーサは釈尊を阿闍梨として、「ブッダを上首とするサンガ」の一員となる。
69 歳	35 年	46 歳	51 歳	ヴァンギーサ、阿羅漢果を得る。
73 歳	39 年	50 歳	55 歳	ヴァンギーサ、東園鹿子母講堂で入滅する。